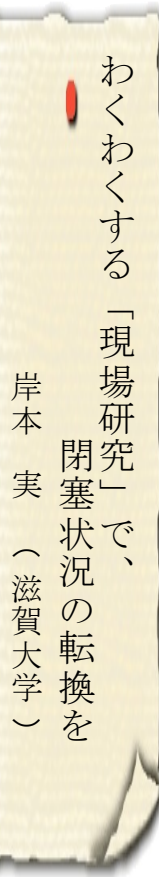


手をつなぐ

題字 藤本利夫書

〈1988年7月9日創刊〉
 発行2019年11月1日 〈毎月1日発行〉
滋賀県民主教育研究所
 〒520-0052大津市朝日が丘1丁目
 11-3 教育文化会館2F
 TEL & FAX 077-525-5364
 教育110番 077-523-3715
 eメールshiga.minken@gmail.com
 HP: http://shiga-minken.jimdo.com/
 振替口座番号(会費振込にご利用ください)
 ①ゆうちょ銀行/記号番号01070-5-40576
 ②滋賀銀行本店営業部/普通口座511256
 加入者(口座)名 滋賀県民主教育研究所



わくわくする「現場研究」で、
 閉塞状況の転換を
 岸本 実 (滋賀大学)

校内研究などの授業研究の数は多いが、その質が疑問である。研究の自主性や主体性が奪われ、「やらされ感」や閉塞感がひろがっているのではないだろうか。

2017年度学力・学習状況調査の学校質問紙調査によると、「授業研究を伴う校内研修を昨年度何回実施しましたか」という質問に対し、滋賀県の小学校の回答は、「年間7回から8回」(35.4%)が最も多く、その前後が一番のピークとなっている。また、年間15回以上も14.3%で二つ目のピークがある。ちなみに、全国平均でも秋田県でも、「年間7回から8回」(全国平均17.8%、秋田県26.5%)が多く、年間15回以上行っている小学校も、全国平均26.8%、秋田県12%である。「授業研究」に熱心なことは日本の学校教育の伝統的な特色の一つであるが、滋賀県も同様の状況といえる。

しかしながら、「教職員は、校内外の研修や研究会に参加し、その成果を教育活動に積極的に反映させていますか」という質問に対して、「よくおこなっている」と回答した滋賀県の小学

校は25.1%で、全国平均38.5%や秋田県53.5%よりも、低くなっている。この結果から、滋賀県の学校では、授業研究を伴う校内研修の数はこなしているが、形式的になっていて、学校の日々の教育活動にとって何の意味も感じない取組みとなっているのではないかと危惧される。学校全体にとって

はそれほど意味がないが、君には意味があるだろうと研究授業の提案を若手の教師に押し付けられているとすれば、今の若い教師が「研究」から逃避するのも無理のないことである。私たち教師が、①先進事例から学び、自分自身や自分の学校に合わせて、洗練化すること、②徹底的に無駄をはぶくこと、そして、③個々の教師の力からチームとしての教師集団の力へと練り上げていくことが求められていると思う。

子どもたちが生き生きと学び合える授業や教室をつくるためには、教師自身が生きて研究し合える校内研究や学校をつくっていくことが肝心である。子どもの学ぶ姿を中心に据えて、自然に授業について学び語り合える居

心地のよい空気感をもった研究会が求められている。滋賀県研が新しく企画した「小・中学校部会」に期待したい。ピーター・M・センゲ(リヒテルズ直子訳)『学習する学校』(英治出版、2014)では、二重(ダブル)ループの省察(振り返り)の重要性が提起されている。今、現場で取組まれている「学びの変革」を、実践して振り返るだけでなく、それが基づいている前提や規範そのものについても省察を深めるのが、二つ目のループである。最初のループの前提や規範を、二つ目のループによって、「無化」あるいは「反転」していくことが可能となるのか。それを可能とするのは、自然に授業を語り合え、学び合える風土をもった「現場研究」の研究会であると思う。

(きしもとみのる)

《 今月の紙面 》

- ・【巻頭言】わくわくする「現場研究」で、閉塞状況の転換を/岸本実……………P1
- ・屈託のない子どもたちの笑顔を求めて/山岡雅博……………P2.3
- ・「特別な支援」を高校で豊かに展開するために /金森 博史・P4.5
- ・「カレーの会」ってこんなところですよ/福井将道……………P6.7
- ・生徒のためになる総合的な学習の時間を/岡本一郎……………P8